

国引き

出雲の国に、意宇という所があります。ここを、どうして意宇とよぶようになったのか、こんないわれがあります。

あるとき、ヤツカミズオミツノの命が、出雲の国を見ていました。

「出雲の国は、まるでせまい布切れのようだなあ。まだ新しい国だけれど、はじめに小さく作りすぎたから、つぎ足して、ぬいあわせて大きくしよう」

命は、海の方をながめました。

はるか、新羅の岬に土地のあまりはないかしらと見ると、土地のあまりがありました。命は、

「あつたぞ」といって、大きなすきを手にとって、魚のうろこに銚を打つようにして、新羅の岬に打ちこみました。そして、「国よ来い、国よ来い」といいながら、太い綱でたぐり寄せました。土地は、そろりそろりと近づいてきて、こちらの岸にくっつきました。そこで、命がぬいつけてできたのが、小津の崖から杵築の岬です。

命は、引き終えた綱を投げ捨てました。それが菌の長浜になりました。引くときに綱をかけた杭は、三瓶山になりました。

それから、北門の佐伎の国を、土地のあまりはないかしらと見ると、土地のあまりがありました。命は、

「あつたぞ」といって、大きなすきを手にとって、魚のうろこに銚を打つようにして、佐伎の国に打ちこみました。そして、「国よ来い、国よ来い」といいながら、太い綱でたぐり寄せました。土地は、そろりそろりと近づいてきて、こちらの岸にくっつきました。そこで、命がぬいつけてできたのが、多久の崖から狭田の国です。

さらに、北門の農波の国を、土地のあまりはないかしらと見ると、土地のあまりがありました。命は、

「あつたぞ」といって、大きなすきを手にとって、魚のうろこに銚を打つようにして、農波の国に打ちこみました。そして、「国よ来い、国よ来い」といいながら、太い綱でたぐり寄せました。土地は、そろりそろりと近づいてきて、こちらの岸にくっつきました。そこで、命がぬいつけてできたのが、宇波の崖から閨見の国です。

また、古志の都都の岬を、土地のあまりはないかしらと見ると、土地のあまりがありました。命

は、

「あつたぞ」といって、大きなすきを手に取つて、魚のうろこに銚を打つようにして都都の岬に打ちこみました。そして、「国よ来い、国よ来い」といいながら、太い綱でたぐり寄せました。土地は、そりそりりと近づいてきて、こちらの岸にくっつきました。そこで、命がぬいつけてできたのが、三穂の岬です。

投げ捨てた綱は、弓ヶ浜になり、綱をかけた杭は大山になりました。

命は、

「さあ、これで、引き終えたぞ」といって、神のしるしの杖を地面に立てました。そのとき、命が「おう」と声をあげたので、そのあたりを意宇とよぶようになったのです。神のしるしを立てた所は、意宇の杜といいます。

村上郁再話

資料『日本古典文学大系風土記』『出雲国風土記』

新羅 古代の朝鮮半島の国家

北門 不明。隠岐の島か？

佐伎の国 不明

多久の崖 不明

農波の国 不明

宇波の崖 不明

古志 北陸地方

都都の岬 能登半島

